

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

大英博物館所蔵「平松家旧蔵楽書資料」について

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1999-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/791">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/791</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 大英博物館所蔵「平松家旧蔵楽書資料」について

豊永聡美

はじめに

一、平松時章について

二、「平松家旧蔵楽書資料」目録

(一) 雅楽楽書

(二) 琴楽楽書

(三) 時章の草稿・書簡・日記等

(四) その他

おわりに

はじめに

英国ロンドンのブルームズベリーにある大英博物館は世界最大級の博物館であり、地理的にも時代的にも幅広く、内容的にも優れた収蔵

品のゆえに、世界中から訪れる観光客や研究者を魅了している。

私は平成九年から一年余り、ロンドン大学客員研究員として同大学東洋アフリカ研究所(SOAS)をベースに研究活動を行った。帰国も近づいた平成十年の始め、大英博物館日本文化部門の責任者であるヴィクター・ハリス氏の御好意により、大英博物館が平成二年に所蔵するに至った「日本の古楽書」<sup>①</sup>を見せて頂く機会を得た。

このコレクションは、まだ目録も無く、整理番号もつけられていない全くの未整理状態にあり、大英博物館側も「日本の古楽書」であること以外は何も知り得ていない状況にあった。膨大な資料は内容的にも一見して、とても専門外の私の手に負えるものではないことは明らかであったし、仮に試みても残り少ない滞在中に読み通し得るものではなかったが、折角の機会であったので自分なりに記録をとって帰国した。

詳細は後述するが、これらの内容としては、古楽書及び江戸時代の琴を中心とした音楽に関係するものであり、記録を基に考察した結果、所蔵印や署名・書簡などから江戸時代中頃に院伝奏を勤めた京都在住の公卿平松時章及び子息時門が所蔵していたものと推定した。そこで本コレクションを「平松家旧蔵楽書資料」と命名して、紹介をしていきたいと思う。

なお、本格的な調査を行った上での報告ではないため、すべての内容を網羅し得ておらず、また書誌学的な記載に欠けるなど不備なところも多く、あくまでも簡単な紹介であることを予め御容赦願いたい。<sup>③</sup>江戸時代における琴士や琴統などについての専門的な知識を持たない私が本稿を成すにあたり、岸辺成雄氏による「江戸時代琴士物語」という論文が貴重な道標となった。<sup>④</sup>平成五年から現在に至るまで毎月欠かさず『楽道』という雑誌に連載されているこの論文は、日本各地に点在する琴や琴士についての実地調査や資料研究を踏まえた、詳細かつ長大なものであり、今回多くの教示を得られた。その他、三谷陽子氏、坂本守正氏、稗田浩雄氏、坂田進一氏等による琴や箏に関する数々の先学研究も有用であった。<sup>⑤</sup>

## 一、平松時章について

平松時章は宝暦四年（一七五四）七月十一日に、平松時行の次男として生まれたが、兄時升が早世したため後嗣となる。本姓は平、号は琴仙と称した。平松家の家格は名家であり、権中納言を先途とする家

柄ではあったが、時章は異例の昇進を遂げて権大納言にまで上っている。

時章は、仙洞（院）の要職である院伝奏を後桜町院と光格院の二代にわたって勤めるとともに、短期間ではあったが議奏職も勤めている。また、関東参向院使にもなっており、しばしば江戸まで赴くことがあった。<sup>⑥</sup>このように政治的には宮廷内での要職にいたった時章であったが、一方では詩歌管絃といった文化的な世界でも名を馳せていた。

文化人としての時章は和歌や漢詩を好み、詩人たちとの交流も多く、詩会にも頻繁に参加している。実際、国立史料館や京都大学附属図書館が所蔵する平松家文書には、時章の詠歌が多数残されている。しかし、時章が和歌や漢詩以上に関心を示したのは管絃、特に琴であった。

「平松家旧蔵楽書資料」は、江戸時代に流布していた多数の琴譜・琴書・琴士伝等から、平安・鎌倉時代に遡る名高い楽書まで広範にして多数に及び、時章がこれらの蔵書を通じて琴のみならず音楽全体への知識を深めていたことが推量される。琴に関して言えば、例えば同資料群中にある「本朝弾琴名手」・「琴之事抜粹」と題する時章の草稿には、天皇や親王を中心に琴の名手とされる人物や名琴について、過去に遡って典拠を挙げつつ列記されており、時章の熱心な研究ぶりが窺える。また、同資料群には琴に関わる内容を書き綴った時章の日記や覚書がいくつも存在しており、これらから時章が琴に強い興味を有していたことのみならず、各地に点在する琴士たちと積極的に交流し

ていたことがわかる。

また、時章の草稿「上皇御筆蘇合香御伝授条々」によれば、光格上皇が文政二年十二月二十七日に四辻公方から筆の大曲蘇合香を受伝しているが、その際に時章は儀式の全般にわたっての重要な役を勤めており、時章の管絃に対する造詣の深さは朝廷内でも認められていたと思われる。

このように時章の琴活動について挙げればきりが無いが、詳細については、「平松家旧蔵楽書資料」に見られる時章の草稿や日記等を精読した後日にでも稿を改めたいと考える。

最後に、現在までの琴士研究では、時章の琴師が誰であったのか正確なところが知られていないと思われるので、以下、簡単に述べておきたい。

時章の草稿『琴事雜纂』（「平松家旧蔵楽書資料」三―三）の記述を追っていくと、時章が琴を習い始めたのは鈴木修敬（京都の儒医、かつ琴士）からであることがわかる。草稿の見出しにも「琴之事抄録并鈴木先生口授」とあり、「修先生云」とか「修敬物語によれば」という文言も多く散見される。しかし、これもこの書の半ばぐらいまでであり、天明年間の記録になるとこうした文言がみられなくなる。それどころか突然に、鈴木先生から習った曲は操縵（基本となる旋律をゆつくりと弾く「音取り」にあたる）のみであり、その他の曲は何も習っていないという記述が見られたかと思えば、「修敬不実モノニテ虚言ヲモツテ人ヲタバカル」と驚くべき辛らつな非難の文言が見え、あげくの果てには「ヤンゴトナク絶交」と記され、修敬との関係が破綻

したことがわかる。

師を失った時章は、知己の理覚院僧都に自分の周りには琴の名人がいないので琴曲に詳しい人を教えて欲しいと依頼している。これに応じて僧都が推挙した人物は、伊勢の琴士杉浦梅岳であった。しかし実際は、その当初「杉浦ハ仕官ノ身ナレバ心ノママニ上京ナリカタキコトヤンゴトナキ次第也」という事情から、杉浦梅岳に代わってその弟子河辺楽斎が時章に琴を教えることになり、天明三年（一七八三）九月十日、時章は理覚院僧都の口入で初めて楽斎に会っている。時章は楽斎について「初而対面歳カツコウ四十計ト見ユ」との印象をもち、弹琴については「其ノ手法ヲミルニヨホト習練シタルモノト見エタリ」と高く評価し、早速琴の教授を楽斎に願ひ出ている。その後、楽斎は三ヶ月おきぐらいに上洛しては、楽斎の師である梅岳や梅岳の師匠小野田東川の弹琴法を説明しながら、丁寧に時章に琴を教授している。

楽斎と知り合ってから三年ほど経った天明六年（一七八六）六月九日、時章は初めて杉浦梅岳と対面している。「梅岳子今年五十三才質朴謙退ノ仁ナリ、日来予通音信ルコトヲ厚ク悦テ謝スタメニ来訪トナリ、琴談、時刻ヲウツセリ、予岳子ノ弹琴ヲ望ム」とその時の様子を記している。梅岳の琴の腕前については、「其弾法甚風雅ナリ、楽斎ニクラフレハ一段上手ト覚ユ、其手法簡約ニシテ何ノサリゲモナク、無ゾウサ也」と賞賛している。しかしながら、梅岳との対面を果たしながらも、その後も梅岳から直接に琴の教習を受けたことは記されていない。梅岳が死去した時も、別の記録に「寛政四年（一七九三）四

月六日 梅岳死去 五十何歳」と戒名と共に淡々と記すのみであることからすると、時章と梅岳との直接の関係はさほど深いものではなかった可能性が高い。

これに続く時章の琴の教習における新たな動きとしては、寛政七年(一七九五)二月に、これもやはり梅岳門人の永田維馨と初めて会って琴の教習を受けている。維馨からの琴の教習はその後も続き、両者は交流を深めている。

以上から整理すると、時章の琴の教習は、時章が三十歳の天明三年(一七八三)に杉浦梅岳の門人河辺楽齋の下で本格的に始まり、後に同じく梅岳門人の永田維馨に師事している。この二人の梅岳の弟子を通じて梅岳やそのまた師匠である小野田東川の弾琴法を学び、上達していったと言える。ただし、彼の記した『琴客系譜』(三一―八)に、いずれも自分を杉浦梅岳の門下として書き入れていることからすると、時章としては、実際に梅岳から直接に指導を受けることは少なかつたものの、杉浦梅岳こそ自分の師匠であると考えていたと言えよう。

## 二、「平松家旧蔵楽書資料」目録

まず、筆者のみならず真先に気になることは、「平松家旧蔵楽書資料」の出所であるが、残念ながら判明できない。

本資料が大英博物館において印や蔵書票もない未整理の状態にあることは前述した通りである。本来、こうしたコレクションが博物館に

寄贈された際には、寄贈者等についての記録が見られるがそれもない。そこで前述のヴィクター・ハリス氏に、寄贈者は誰か、またどのような経緯で大英博物館が所蔵するに至ったのかを尋ねた。しかし、寄贈者の強い意向により公表しないこととされているとのことであり、わずかに平成二年に日本から直接に寄贈されたものであること以外は知ることができなかった。

平松時章は、前章で述べたように政治および文化の両面で活躍した人物であり、京都大学附属図書館や国立史料館が所蔵する時章関係の史料は多方面にわたるが、ここに述べる大英博物館所蔵の「平松家旧蔵楽書資料」はほとんど音楽に関係するものばかりである。

具体的な内容としては、(一)平安・鎌倉期を中心に流布した雅楽関係の楽書、(二)江戸時代に流布した琴譜や琴史を中心とする琴楽関係の楽書、(三)琴に関わる内容をもつ時章の草稿や書簡・日記等、そして(四)琴囊に関わる物や箏、和琴の爪・柱・糸類といった楽器の付属品や楽琵琶等の楽器類に関する資料に大別できる。

本報告では、楽器類に関するものについては割愛し、文書史料を中心に概略紹介をしていきたい。

### (一) 雅楽楽書

#### 1 絲竹口伝

管絃の口伝書。

写 一冊

奥書「嘉曆二年丁卯三月十五日 参議正三位有頼兼小陸 在判」

2 夜鶴庭訓抄

管絃の口伝書。「平松蔵」の蔵書印あり。

写 一冊

5 残夜抄

雅楽口伝書。「平松蔵」と蔵書印あり。

写 一冊

3 龍鳴抄

雅楽の解説書。「平松蔵」の蔵書印あり。

写 一冊

抄 或号迷路抄／人のをやの心はやみにあらねども／子を思ふみちに／まよひぬるかな／異本けにもさる事／朱筆南無阿弥陀仏。

奥書「嘉禄二年六月六日 見之記了 音楽生散位藤原孝道 在

判」

中甸於武城客写焉／源龍」

「于時慶安二年七月日 以藤原孝道本書写之者也 左中将

藤原季賢 判」

「朱筆／右称異者正五位下行左近将監豊原倫秋書写伊予守昌倫宿祢秘蔵本者也」。

「四辻季賢卿自筆本依上家□□<sup>(8)</sup>令書写者也 延享四<sup>卯</sup>年十月

日 左近将監近教 (花押)」。

\* 静嘉堂文庫が所蔵する『残夜抄』の諸本と奥書が同一である。

\* 標題はないが、本書の内容及び『群書類従』第十九輯に活字化されている類従本の奥書「于時嘉禄二年十月六日書写了」「于時嘉禄三年六月六日散位在判」(本書との年月日の若干の相違は書写の間違いと思われる)から、大神基政の著した雅楽曲の解説書『龍鳴抄』の抄出本と思われる。

なお、関白近衛家基の自筆本を書写している源龍(鈴木蘭園)という人物は、法隆寺所蔵の有名な開元琴を初めて模造した江戸時代の琴士であり、平松時章の最初の師匠となった人(鈴木修敬)である。彼は医者でもあり、かの有名な華岡青洲の師である。

抄』の抄出本と思われる。

6 木師抄

なお、『群書類従』第四管絃部所収の『龍鳴抄』についての解題

楽琵琶の口伝書。奥書なし。

では、奥書に「この散位はだれだかわからない」と記されているが、本書から藤原孝道と言えよう。

7 胡琴教録

琵琶の師説書。六字の朱印あり。

写 二冊

4 懷竹抄

雅楽横笛書。奥書なし。

写 一冊

外題「胡琴教録 乾」「胡琴教録 坤」。

奥書「以左近大史将監中原光氏之秘本令書写之、秘書之間荒涼之人有其憚、仍以女性令書之間、僻字等多、得其意追可書改

之 左近少将 判。

8 胡琴教録

写 二冊

前掲の胡琴教録とは別本。奥書なし。

9 舞楽符合鈔

写 一冊

舞楽の打物秘事秘説書。奥書なし。

内題「舞楽符合鈔 興福寺住侶聖宣撰」。「諸楽打物等」から始まる。

10 周伶金玉抄

写 一冊

雅楽打物に関する書。

奥書「寛文拾年<sup>辛亥</sup> 曆林鐘吉辰／從四位下行甲斐守狛宿祢光逸」。

\* 寛文十年という年号が正しいならば、干支は庚戌である。干支の辛亥が正しいならば、年号は寛文十一年となるべきである。

11 問裏録

写 一冊

雅楽書。

奥書「文化歳次乙丑<sup>(二年)</sup>秋九月／從五位上行丹波守狛好古写」

12 梁塵秘抄口伝集抜粹

写 一冊

歌謡論。「平松蔵」と蔵書印あり。

「梁塵秘抄口伝集」巻第十四の二カ所を抜粹したもの。

13 管絃音義

写 一冊

雅楽の楽律・楽調義釈書。

内題「管絃音義 北山隱倫涼金草」。

識語「于時文治元年仲冬二十三日北山隱倫涼金草之」とあり。

奥書「正安二年<sup>歲次</sup>六月一日於四天王寺岸田／毘盧遮那院住坊書  
写畢 筆定慶生年十九」

14 五重十操記

写 一冊

雅楽の文献書。

奥書「安永八己亥年五月十一日書写了／正三位行左京大夫 藤原  
(花押)」。

15 坐間筆語・江関筆談

一冊

新井白石著。正徳元年の朝鮮使臣の来聘における楽曲に関する筆談。

表紙「坐間筆語 附江関筆談 全」。

見返「日本 白石先生筆語／朝鮮 趙泰徳輯／ 坐間筆語 附江関筆談 全／平安書肆 君□玉当梓」「寛政新刻」。

版元「京二条通高倉角／八文字屋正兵衛」。

16 律呂精義

写 一冊

音律書。卷之八。

17 律書 写 一冊  
音律書。

奥書「永仁三年五月六日於北山殿本願院書写之畢／魚山末流圓  
珠生年三十二」

「後日記之／享保二年中書写之、年月日失念 善逝院咸開」。

18 類箏治要 写 十五冊

箏の楽譜集成。卷五から卷二十（卷十六欠）。

奥書「類箏治要全二十冊 内五冊者以別本書加之、／新院御本書脱

帖小倉大納言殿藤原実起卿御写本／無之、以別本書加

之、五冊之内也、是亦無他見、以神文／写留之本也、相承

之子孫固守此旨而無言外／書写之漏脱可繼堯執心之志而

已、／延宝五丁巳年十月二十三日／從四位下行因幡守伯近

完（花押）」。

木製の外帙あり。

19 秦箏要録 写 一冊

箏の楽譜。題簽「秦箏要録」。永正年間の写し。

20 三五要録 写 一冊

琵琶譜。

21 〔鳳笙事並相承事〕 写 一冊

笙の師資相承系譜。標題はないが、「鳳笙事」「相承事」と見られ、内容から「続群書類従」管絃部に「鳳笙師伝相承」の名称を付して翻刻されている笙の師資相承系譜と思われる。<sup>9)</sup> 奥書等はない。

22 〔鳳笙譜〕 写 一冊

笙の平調の楽譜。標題なし。

奥書「右此譜依 勅定加一校拍子以下直之畢／但猶可有意失者

歟／延徳三年九月日 繁秋（花押）<sup>10)</sup>」。

23 〔鳳笙譜〕 写 一冊

笙の黄鐘調の楽譜。標題なし。

奥書「延徳三年十二月日 繁秋 判」。

24 芦声抄 写 一冊

雅楽箏楽譜集成。外題「芦声抄 高麗曲」。

25 箏楽譜 写 一冊

題簽「箏楽譜」。

26 高麗箏楽譜 一冊

箏楽の高麗曲の楽譜。奥書なし。

27 蘇合香 一冊



蘇合香筆策譜。

内題「蘇合香 新樂大曲序拍子二ノ樂拍子三次七拍子」

見返に「寛政十二夜近<sup>(註)</sup>寿宿祢来會蘇合間事口伝」と題して、時章自身の覚書が記されている。

4 太古遺音

明の楊掄撰。

『琴譜合璧』(3)の一部か、別本か未確認。

5 琴経

明の張大命撰『陽春堂琴経』か。

卷之一、卷之三のみ。

28 蘇合香

外題「蘇合香 自序至五帖」。

写 一冊

(二) 琴樂樂書

〔中国琴譜〕

1 琴譜

明の徐青山著『青山琴譜』。

見返「徐青山先生訂正ノ琴譜ノ大還閣蔵板」。卷一が二冊、卷五まで各一冊で合わせて六冊。

版 六冊

6 青蓮舫琴雅

明の林有麟が著した琴書。<sup>(註)</sup>

「雲間林有麟仁甫輯」とあり。

四冊

7 真伝琴譜

外題「真伝琴譜 抜萃」。はじめに「利太古琴序」がある。

版 一冊

2 万峯閣指法関箋

清の徐猷著。

奥書「安永七戊戌年十二月七日謄写於江戸之僑居、天明四年甲辰初夏写之益原本琴客积雲海蔵也 結網斎主人書」。

写 一冊

8 琴史

外題「琴史 鈔本」。内題「琴史 抄卷第六ノ宋 朱長文伯原」。

一冊

9 頴宮礼楽疏

明の李之藻が著した中国雅楽の概説書。

一冊

3 琴譜合璧

清の和素著。明の楊掄撰『太古遺音』の満州文訳。

版 一冊

10 操縵古楽譜

見返「太古遺音ノ新刻 琴譜合璧ノ書林李叔寔梓行」。

写 一冊

「操漫古楽譜 / 維篇申明上文可嘖反復 / 之意故不厭其文義重出 / 鄭世子臣載増編述」。奥書「天明第三癸卯仲冬 写之」。

一冊 / 琴手法図 一冊 / 調琴法 一通 / 是ハ琴ノシラベヤウニ 已上 物部茂卿」。

\* 物部茂卿は荻生徂徠のこと。

〔日本〕

11 東臯琴譜

四冊

外題「東臯琴譜春」・「東臯琴譜夏」・「東臯琴譜秋」・「東臯琴譜冬」とあり、それぞれの末尾に「神品執徐、孟冬再校正」・「時丙寅新秋仙華埜樵録」・「東臯越杜多訂正」・「東臯懶衲手校」と見られる。

16 幽蘭曲

一冊

「幽蘭曲第一段」「物観校正」。

\* 物観は荻生徂徠の弟荻生北溪（物部観）のこと。

17 標題なし。

写 一冊

碪石調幽蘭の琴用指法についての書。

12 東臯禪師五十曲琴譜

一冊

外包みに朱書きで標題あり。

奥書「金龍道人釈敬雄再閲」、二つ印章あり。

18 釈談章

一冊

『東臯琴譜』にある琴曲「釈談章」の譜か。内容は未確認。

13 碪石調幽蘭抄

一冊

外題「碪石調幽蘭抄 上」。

19 琴瑟合楽律

一冊

14 碪石調幽蘭序  
奥書「以河辺楽斎本書写一校了 / 天明三年十二月二十四日 / 琴仙堂主人」。

末尾に「明和二年 姫路城主従四位下左近衛少将源忠恭」とある。

\* 琴仙堂とは平松時章の号名。

20 雅琴譜

一冊

外題「雅琴譜 / 尙越調」。

15 〔碪石調幽蘭〕

一冊

標題なし。末尾に目録あり。「目録 / 幽蘭譜 一冊 / 琴左右手法

21 雷琴記

写 一冊

内題「雷琴記 平安 源龍綴」。

\* この書は時章の最初の師匠であった源龍（鈴木蘭園）が、法隆寺所蔵の有名な開元琴を精査して記したものである。

22 絲桐譚 写 一冊

山本徳甫（児玉空々門下）が古琴についてまとめた草稿。

外題「絲桐譚 草本」。内題は無く、書出し「古琴真図目次 皆係唐山製 山本鄰積年所集」。識語末「文政十一年戊子五月二十三日 蝸殼山本鄰識」。奥書「戊子<sup>（文政十一年八月）</sup> 中秋 山本鄰誌す」。跋文あり。

\* 斎藤謙（拙堂）は、津藩の儒者で琴を好み、永田霸道の門下生であった。

24 十牛頌 写 一冊

外題「十牛頌 附彈琴手法 人見友雪家蔵」。

25 玉堂琴士集 版 一冊

見返「甲寅年刊 / 玉堂琴士集 / 本衙蔵板」。

26 字母源流諺解 一冊

内題「莊蝶庵訂正字母源流諺解 / 東川埜廷賓 口授 / 金谷橋元周 筆記」。奥書「寛政丁巳孟冬<sup>（九年）</sup> 月池桂国瑞識」。

27 琴学発揮 一冊

山縣大弑著。

28 琴楽伝授略系 写 一冊

外題「琴家略伝 新楽閑叟記 全」。内題「琴楽伝授略系」。

\* 東臯禅師から人見友元・杉浦正職へと繋がる伝授系譜。

なお、この書は日本では未見と思われる、数々の古琴とその所蔵者についてや著者の徳甫及び徳甫の師である児玉空々やその一門についてを知る上でも貴重な書といえよう。

23 琴師霸道翁伝 写 一冊

永田霸道（維馨）伝。

荻生徂徠の琴学概論書。

外題「琴師霸道翁伝」。内題「琴師霸道翁伝 / 拙堂 斎藤謙撰」。外題「琴学大意抄」。奥書「享保七年<sup>（壬寅）</sup> 四月二十八日 物部茂

卿。「平松蔵」と「平松時章」の二つの蔵書印あり。

30 楽制篇

荻生徂徠の楽についての解説書。

外題「楽制篇 完」。内題「楽制篇 物茂卿撰」。

奥書「十月三日夜長安於客膳写之終／遠淡海 中村重純」

写 一冊

\* 熊本の琴統の中心にあった琴山についてのみならず、江戸時代の琴史を知ることができる、日本では未見の貴重な書である。<sup>(13)</sup>

辰四月朔日浄写卒業於琴山小隱玄響室」と記されており、成稿年代がわかる。

31 書名不詳。

小野田東川自筆の雅琴弾法に関する書。

奥書「享保二十歳次乙卯九月重陽之翼／藤国光於松菊舎譚識」。

藤国光（小野田東川）朱印あり。

写 一冊

\* 琴の管絃化（琴の雅楽への参加）が八代徳川吉宗の命によりなされたが、その命を受けて成功させた一人が小野田東川であり、その

詳細を記したのが本書である。幕府による雅琴化の動向知る上で貴重な日本では未見の書と言えよう。

32 琴山琴録

村井琴山著。巻之一から巻之七及び別冊の合わせて八冊。

外題「琴山琴録」・「琴山琴録 一から七」。内題「琴山琴録」・

「琴山琴録巻之一から巻之七」。各巻の始めに「蘭思琴所蔵」とある。「蘭思琴」とは琴山が愛蔵した琴銘であり、琴山自身の所蔵本であったと思われる。

巻之一の末尾近くに「寛政二年庚戌三月二十四日草稿卒業八年丙

写 全八冊

33 琴山琴録

村井琴山著。外題「琴山琴録 全三冊」。見返「文化辛未新鐫／

琴山琴録／豹隱書室蔵」。奥付「文化八年辛未五月／浪華書林／高麗橋通淀屋橋筋／加嶋屋久兵衛」。李順（高本紫溟）の序文（「文化丙寅之春二月／熊府李順撰／李順の印章二つ」。村井琴山自身の

跋文（「文化丙寅季冬／琴山井柁識／琴山の印章二つ」）に続いて、南豊曾亮（琴山の門人で豊後出身の曾子坊のことか）の跋文（「題

琴山先生琴録後／（中略）／文化丙寅春二月／門人 南豊曾亮謹識／印章二つ」）そして大城煥（大城壺梁）の跋文（「文化丙寅之春／大城煥／印章三つ」）がある。<sup>(14)</sup>

\* 上中下三巻の構成をもつ本書は、前書（32）の内容を簡略化して

まとめたものであり、日本にも数冊ある。その内の一冊は国学院高校の藤田小林文庫が所蔵しているが、<sup>(15)</sup>見返の記載が異なり、南豊曾亮の跋文及び印記が欠如しているなど大英本とは版元が異なる。

34 竹洞集

内題「竹洞集」。外題「竹洞先生興心越禪師書／同 興朝鮮使洪

滄浪筆談／同 国字弾琴指法」。末尾「下野 新楽閑叟 定誌」。

写 一冊

35 平公霹靂琴贊并引

内題「平公霹靂琴贊并引」。大神景貫が記したものを。奥書「寛政五歳癸丑臘月〔正月〕 雅楽頭大神景貫謹撰」。

\* 時章が愛蔵した「霹靂琴」を所蔵するに至った経緯が記されている。<sup>16)</sup>

(三) 時章の草稿・書簡・日記等

1 本朝弹琴名手

草稿 一冊

初頁に「本朝弹琴名手／自天子至庶人時代不同追可次第群書管見之次拔／萃之」とあり、琴が盛んであった古代を中心に、出典を明記しながら琴の名手とされる人物を列記している。典拠史料は幅広く、かなりの文献に目を通していたことがわかる。

2 琴之事抜粹

草稿 一冊

外題「琴」。内題「琴之事抜粹」。『拾芥抄』・『夜鶴庭訓抄』・『壺囊抄』等をはじめとする楽書や『万葉集』・『本朝文粹』・『新勅撰和歌集』等の歌集から、名琴に関わる内容を抽出して列記したものを。前掲の『本朝弹琴名手』と同様に、多くの古文獻に当たりながら、時章が琴の研究を熱心に行っていたことがわかる草稿である。

3 琴事雑纂

草稿 一冊

題簽「琴事雑纂 或云琴客綺談」。まず、「琴之事抄録并鈴木先生口授」という見出しがたてられ、琴の手法や琴譜・琴絃・琴楽論な

どについて、鈴木修敬（時章の最初の師匠）からの口授を基に覚書風に書き連ねている。ところが半ばぐらいになると、天明三年九月十日の日付から始まる日記風に改まり、寛政七年二月頃までの記録が綴られている。この間、時章の師匠となる河辺楽斎・杉浦梅岳・永田維馨と初めて対面した時の様子や琴の稽古模様が記されているなど、時章の琴活動を知る上では、貴重な記録である。

4 覚書

一冊

標題なし。初頁の見出しに「申来妙尼」とある。妙尼とは時章の弟子菊舎尼のことを指すと思われる、内容としては、世間の琴士の動向や琴について詳しい菊舎尼から聞いたことを中心に記したものである。

記録の期間は寛政七〜九年にかけてのものであり、前掲の『琴事雑纂』と書式が似ており、その続きとも思われる。

5 玉堂清話

草稿 一冊

外題「玉堂清話」。見出しに「対問」とあり、「一、琴曲宮音角音事、一、琴史宋長文事、一、霹靂琴製作談合事（下略）」と続いている。最後までの内容を確認できなかったが、恐らく浦上玉堂と琴について対談した内容をまとめたものと思われる。

6 文政六年 音楽 卷子本

外題「文政六年 音楽」

7 日記 一冊

標題なし。記録期間は文政八年三月・四月であり、ほとんどが琴に関わる内容である。

8 琴客系譜

時章自筆の琴客系譜。東臯禪師から始まり、その門下狛近任・杉浦梅岳を中心とする系譜。この系譜により時章と師弟関係にある琴士がわかる。

9 妙音天尊像彫刻之雜記 草稿 一冊

時章の覚書。外題「天明四年六月／妙音天尊像彫刻之雜記」。

10 東臯禪師影供備忘 写 一冊

\* 時章自身による備忘記かどうかは未確認。

〔伝授関係〕

11 楽道大曲伝授記 草稿 一冊

外題「文化二年十月一日／私記 楽道大曲伝授」。甲斐守狛近寿ちかひなかと宿禰の筆筆蘇合香曲伝授を記したものである。記録期間は文化二年九月二十六日から同年十月十九日。

12 文政二年 上皇御筆蘇合香御伝授條々 草稿 一冊

外題「文政二年十二月二十七日／上皇御筆蘇合香御伝授條々」。

文政二年十二月に光格上皇が四辻公万から箏の大曲蘇合香を受伝するにあたっての儀式次第等を詳細に記した興味深い史料である。

13 文政三年蘇合香伝授書留 書簡

外袋の上書き「文政三年二月五日／箏大曲蘇合従四辻家／伝授之節書留」。

文政三年二月五日になされた時章の大曲蘇合香受伝に関わる書簡等が白袋に納められている。具体的には、時章の大曲受伝を祝して内大臣藤原公修・前大納言藤原実富・前大納言藤原資矩・前参議平行宣等から時章に宛てられた書簡や、時章と前大納言四辻公万（時章に蘇合香を伝授）との往復書簡等がある。

#### (四) その他

1 琴囊書体

外包みに「琴囊書体／寛政己未八月日桂川／甫周需揮毫興之」と記され、桂川甫周（月池）が時章に依頼した書の下書きが納められている。なお、寛政十三年（享和元年）にも同様に、紀州家中の菊池内記から琴囊の書を頼まれているが、時章は年号だけ改めて同じ書体の書を送ったと記し、この下書きには改めた年号が貼られている。

2 琴銘字「潤泉」

外包みに「琴銘字『潤泉』／寛政七年二月伊勢琴客永田維馨相

願書付遺余分」と記され、中には「潤泉」と書かれたものが数枚入っている。

13 東齋隨筆

一冊

室町期の説話集（音楽関係の説話も見られる）。

奥書「文明十七年春二月 日／明林（待明院）藤原基春 在判」

3 琴薦図 寛政甲寅冬閏月菊舎尼持来因図之

14 令義解

全十冊

4 霹靂琴銘 大清人張炳書

『養老令』の注釈書。「温古堂蔵」とあり、版本か写本か未確認。

5 琴服 以菊舎尼（上人）所携囊模作

15 文政十三年五月七日 四辻大納言公説卿箏門入之時誓状案（時門）

6 琴囊紙形 以或人所持摸造

16 箏曲の相伝状（時門）

7 琴囊雛形 四

四辻公説から時章の子息時門への箏曲「輪説」の相伝状。天保五年十一月一日の日付あり。

8 和州法隆寺雷氏琴制度雛形 天明四甲辰九月上旬（下略）

17 四辻公説書状（時門）

9 伶官辻家所蔵琴囊雛形

包紙の上書きに「天保五年十一月二十三日夜／来二十八日御楽始所作可為箏更被仰出候付内々為心得四辻前垂相（ヨリ）被示候書状」とあり。

10 華製琴囊雛形

11 藍色琴脚舗 摸製家蔵越（カ）帛遺品

おわりに

12 法和州法隆寺蔵唐開元雷氏琴 天明三年十二月二十日 平安琴工

藤原盛次摸造

大英博物館が所蔵する「平松家旧蔵楽書資料」により、平松時章が琴楽書を中心とする楽書の一大蒐集家であったことがわかった。時章

が雅楽の長い伝統をもつ京都の地に在住し、しかも公卿という高い身分であったことから、例えば都に住む楽家から彼等が秘蔵する楽書を借用し、書き写すことができるなど恵まれた環境にあったことは明らかであるが、その広範な蒐集ぶりから時章の並外れた熱意が窺える。また、これまで不分明であった時章の琴の師匠や修養についても知ることができた。

しかし、「平松家旧蔵楽書資料」の史料的价值はこれだけに尽きない。まず、時章が京都における琴統の中心的存在であっただけに、当時の事情を詳細に述べる時章自身の草稿や日記等は、江戸時代中頃の琴史を研究する上で極めて有用である。

また、江戸中期にいわば朝廷と幕府との共同事業の形でなされた雅楽の再興についてを知る上でも貴重な史料と言える。雅楽の再興の一環として、琴の雅楽化（雅琴化）が八代將軍吉宗の命によって、京都と江戸の楽人の協力によってなされたが、本資料にはその中心的な役割を果たした小野田東川の著述や雅琴化の子細が記されている村井琴山の『琴山琴録』等が含まれており、朝幕間における雅楽再興の在り方を考察する上で、貴重な資料群と言えよう。

## 註

- (1) 江戸時代以降の楽書は、厳密には「古楽書」とは呼ばないが、ここで大英博物館で用いられていた呼称によった。
- (2) 所蔵品のほとんどは時章の所持したものと想定されるが、いくつか時

章の子息時門関係の文書（四―16・17・18）も含まれているので、「平松家旧蔵楽書資料」と命名した。

- (3) 大英博物館でこのコレクションに遭遇した時は、私の専門外ということもあって、これらの資料を紹介することを考えていなかった。そのため、資料名の簡略な記録しかせず、写真撮影も関心を持ったものしか行なわなかった。書写の際の誤読・誤字・脱字がありえることに加え、文書の状態が好ましくないために開かなかった包みもあるなど、内容的にも不完全なものであるため、紹介のために活字化することに大きなためらいもあった。しかし、一方で江戸時代の琴史研究において、重要な位置を占める平松時章のコレクションが、遠く離れた異国の地に存在することを報告するだけでも意義のあることと考え、拙稿を發表することとした次第である。

- (4) 「鴛鴦の琴人 江戸時代琴士物語 第一話」（『楽道』六一八号平成五年四月）から毎月連載。この他、氏による以下の論考も参照した。「日本琴士探索随記」（『東洋音楽研究』四八号 昭和五十八年九月）。同氏他「田安德川家蔵楽書目録―その資料的意義―」（『東洋音楽研究』四一・四二号 昭和五十二年）。

- (5) 三谷陽子『東アジア琴箏の研究』（全音楽譜出版社 昭和五十五年）。同「永田聴泉琴楽資料について」（『東洋音楽研究』四九号 昭和五十九年）。坂本守正、稗田浩雄『訳注鳥海翁琴話』（冬青社 昭和六十年）。坂田進一「聖堂の琴（一）（二）」（『斯文』一〇六・一〇七 平成十、十一年）。また、「第十二回展覧 琴楽資料展解題目録」（上野学園日本音楽資料室 昭和六十三年）も江戸時代の琴楽を研究する上で重要な解題目



録である。なお、日本の琴統、琴士等に関する先駆的研究として、元駐日オランダ大使ロバート・ハンス・ヴァン・グーリック(高羅佩)『琴道 The Lore of the Chinese Lute』(初版、上智大学刊、昭和十五年。改訂版、タトル商会刊、昭和四十四年)の付録四「The Chinese Lute in Japan」がある。その他、坂本守正、稗田浩雄氏による「七絃琴士列伝 琴士散策」という論考が雑誌『冬青』に掲載されていたようだが、残念ながらこの雑誌を入手することができなかった。(雑誌入手の件にあたっては、東京音楽大学附属図書館の植竹彰子氏に大変お世話になり、篤く御礼申し上げる)。

- (6) 平松時章の略歴等に関しては、「山城国京都平松家文書目録解題」(『史料館所蔵史料目録』第三十一集 国立史料館編集 昭和五十五年)によった。なお、本書の存在をはじめ江戸時代の文献について東京大学史料編纂所の山口和夫氏より、多くの御教示を賜った。記して感謝の意を表す。
- (7) 標題が定かではないものについては、「」をつけて仮称とした。また、写本か版本かを記していないものは、記録をしてこなかったために不明なものである。なお、奥書等の翻刻に際しては原則として常用漢字を用いた。
- (8) 二字書かれているが、筆者の書写した字が解読不能になっている。
- (9) この相承系譜については、福島和夫「音楽相承系図集」考 付翻刻」(『日本音楽史研究』一号 平成七年)が詳しく、『続群書類従』本の問題点についても指摘されている。
- (10) 豊原繁秋は、明応二年(一四九三)に後土御門天皇に笙の秘曲を伝授

した人物である(『明応二年鳳管漣頂記』『続群書類従』管絃部 第十九輯上)。

- (11) 岸辺成雄氏によれば、この書は「楽譜ではなく、典故・賦詠を集録したものだ」ということである(『楽道』六九二号 一九九六年六月)。
- (12) 岸辺成雄「江戸時代の琴士物語第十一話―江戸の琴士(十七)」(『楽道』六九三号 一九九九年七月)。
- (13) 『琴山琴録』については、すべて写真撮影をしてきた。内容的にも紹介する価値があると思われるので稿を改めたい。
- (14) 時章の覚書に「菊舎尼云肥後国琴師椿寿ト云人アリ琴客也ト琴弾ク料トシテ山中ニ茅屋ラムスビ風流ヲツクスト」(三一四)と記されていることからすると、時章は村井琴山との面識はなかったと思われる。時章が『琴山琴録』を所持するに至った経緯としては、琴山と親しく、時章の弟子でもあった菊舎尼の仲介によることが推測される。
- (15) 藤田・小林文庫所蔵『琴山琴録』の閲覧に際しては、国学院高校の鈴木義雄先生にお世話になり、篤く御礼申し上げます。
- (16) 『琴事雜纂』(三一三)にも、この霹靂琴のことが記されているが、時章が愛蔵した霹靂琴とは、播磨国の十輪寺という境内にある神雷木(雷が落ちた木)を、琴材として作られた琴をいう。

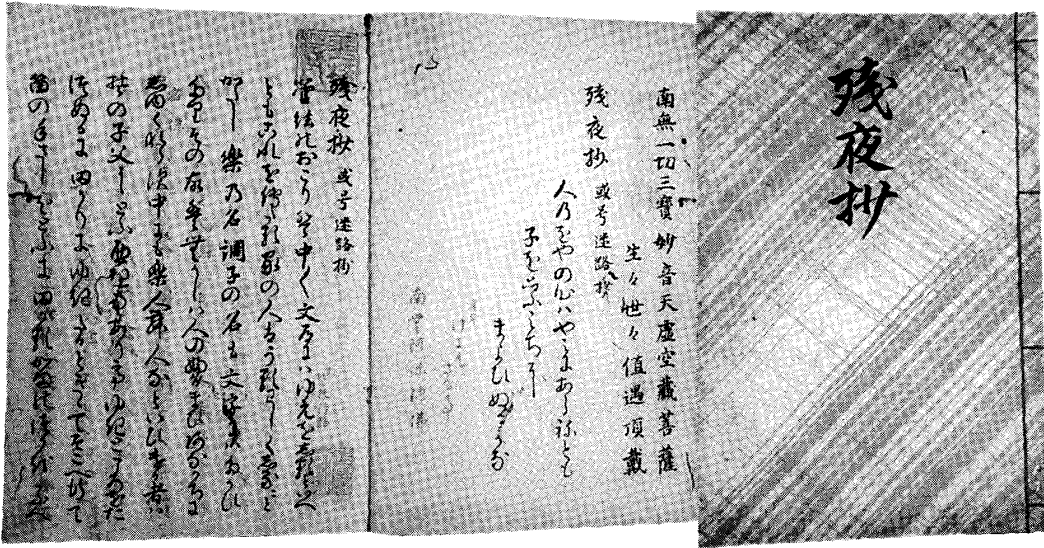
#### 〔付記〕

貴重なコレクションの閲覧機会を与えて下さった大英博物館日本文化部門の責任者ヴィクター・ハリス氏、博物館を私が訪れるたびに入館に同行し(部外者が単独では入室できないため)、また閲覧に必要な撮影機等の準

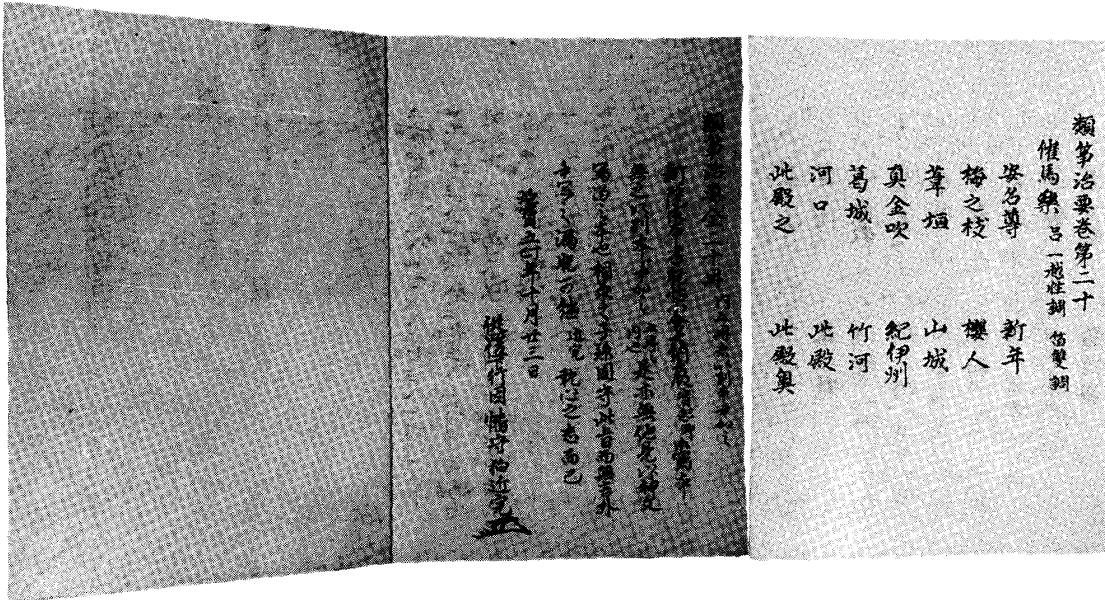
備をして下さった同部門のデイビッド・ペン氏及びポール・マーチン氏、  
そして小稿をまとめるにあたり、多くの御教示を賜った上野学園日本音楽  
史料室長の福島和夫氏、高橋秀樹氏に心から感謝申し上げます。

なお、私が帰国した後の平成十年八月末に、大英博物館の依頼を受けた  
東京国立文化財研究所による本資料の本格的な調査が行なわれており、報  
告書の完成が待たれる。

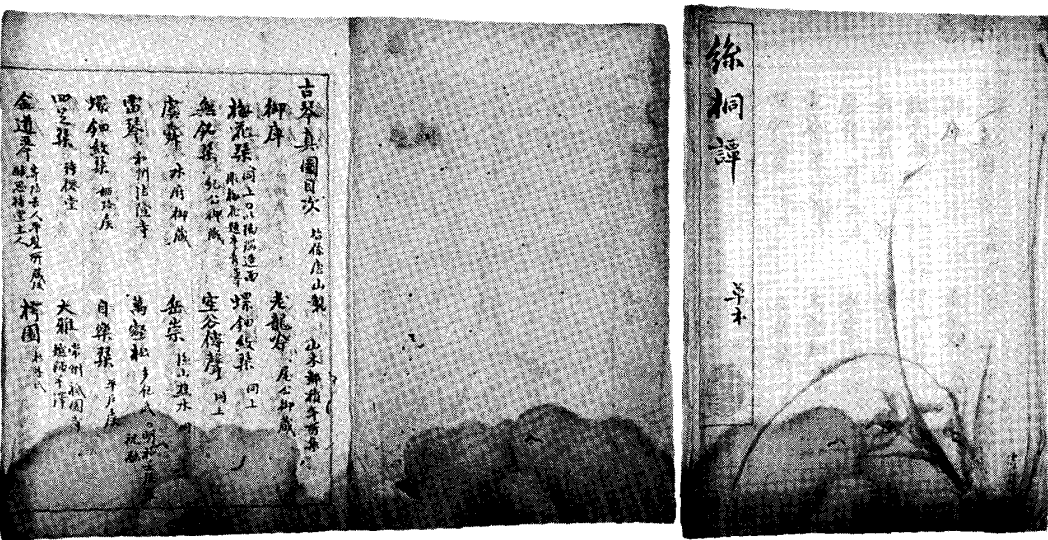
1 残夜抄 (二—5)

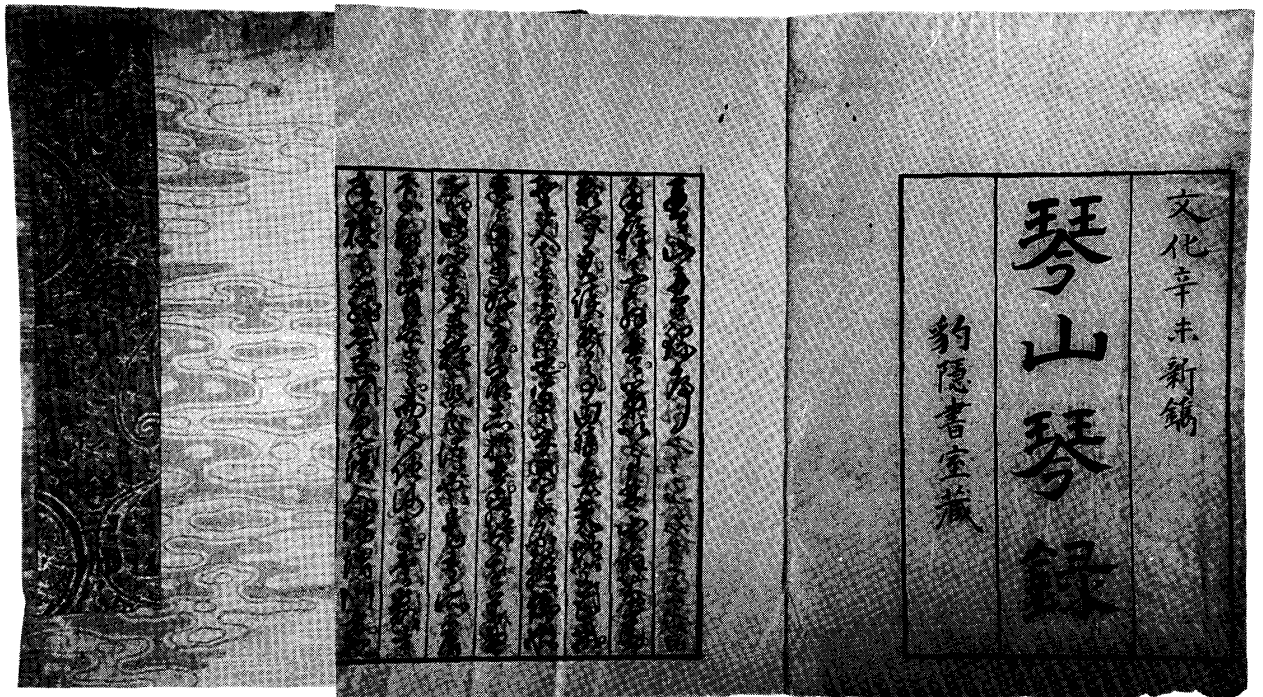
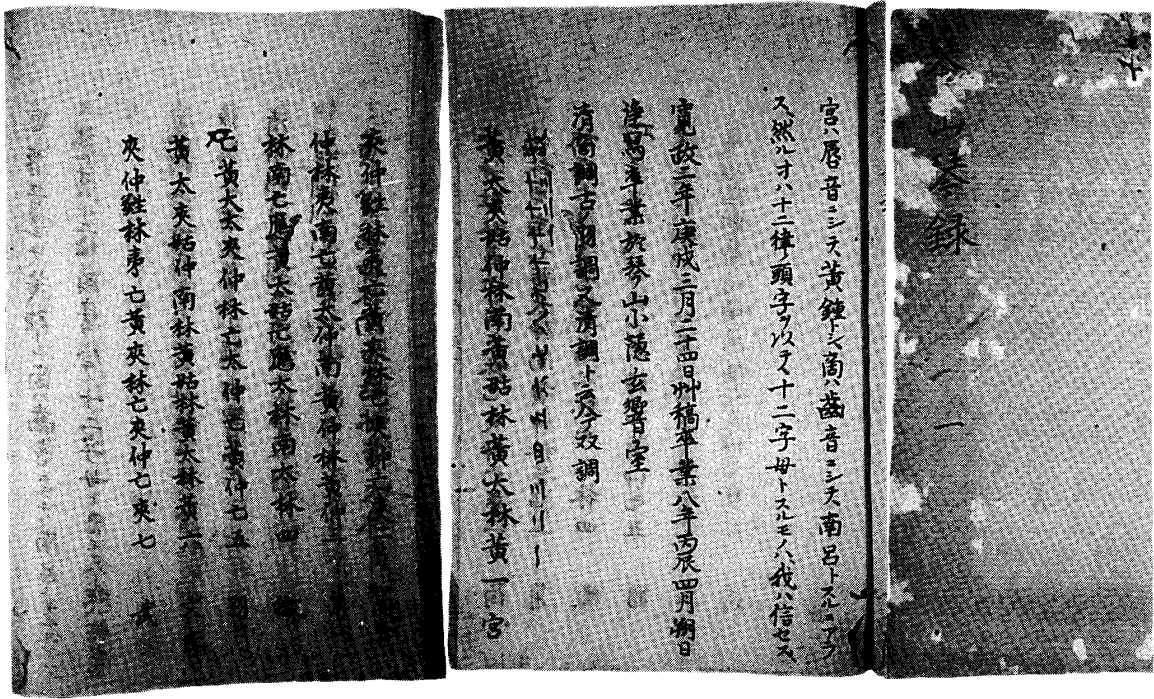


2 類筆治要 (二—17)



3 絲桐譚 (二—23)





5 琴山琴錄 (二—34)





琴客系譜

本前權河人本朝名中惟化  
 本后侍奉不務於學會  
 任法明相國寺光祿寺少卿  
 曾化於五十七

東泉禪師 名遠 不知何許人  
 東川居士

出雲守正藏 新豐禪師 後堂  
 鈴木龍 冷東隱士

恂如

豐前守近信伯称 會三坪下院正首  
 右京亮則實伯 關重高

三位入道采山 前權中納言隆英卿

前權大納言通俊卿

前權中納言重豐卿

河内守利容朝臣

伊藤某

杉浦元恢 僧學了

河邊教道

河邊樂爾

永田維馨

星野政休

前見外道梅仙

藤堂光寬

杉浦元恢 僧學了

河邊教道

河邊樂爾

永田維馨

星野政休

前見外道梅仙

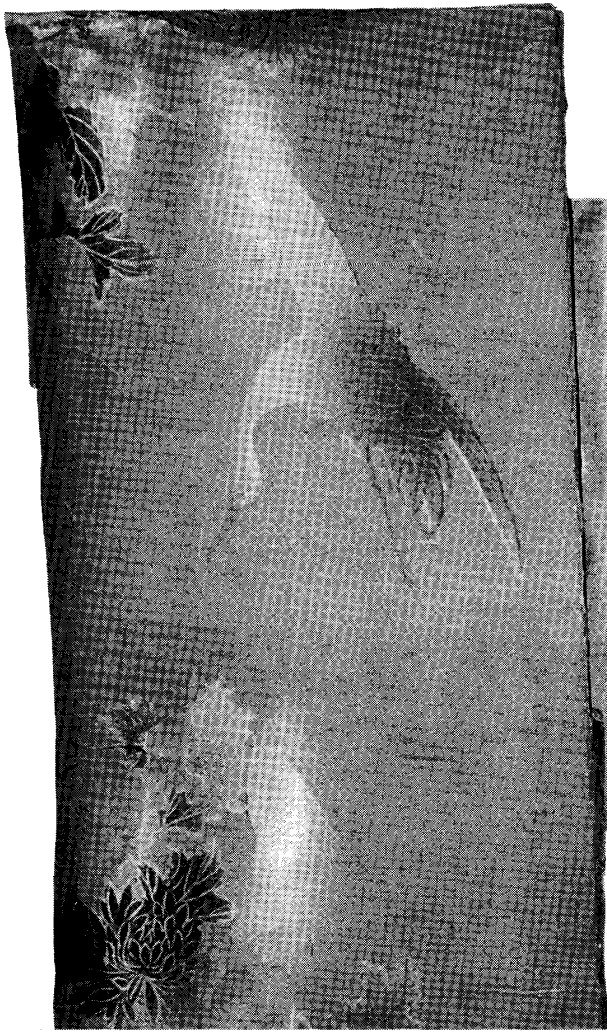
藤堂光寬

從三位時章 橋一貫

中並寺近壽伯称

左兵衛佐公碩朝臣

菊舎尼



右靈琴  
天下憂應を深夜獨吟頼  
内匠命を聞矣内見之及再  
曰復不思議以靈琴春  
利官供神前  
國家安寧  
皇祚無窮奉祈  
慶安元歲十月五日 只藤原應山

9 箏の柱